

山形城三の丸跡（第22次）

遺跡番号	201-003
調査回数	第22次
所在地	山形県山形市本町1丁目外 地内
北緯・東経	38度15分3秒・140度20分7秒
調査委託者	山形県村山総合支庁建設部都市計画課
起因事業	山形広域都市計画道路事業3・2・5旅籠町八日町線
調査面積	830㎡
受託期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
現地調査	令和3年6月21日～10月28日
調査担当者	齋藤健（現場責任者）・渡辺和行
調査協力	山形市企画調整部文化振興課、山形県教育庁村山教育事務所
遺跡種別	集落跡・城館跡
時代	奈良・平安・中世・近世
遺構	竪穴建物跡・土坑・溝跡・柱穴
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・金属器・石製品・木製品（文化財認定箱数：27箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

山形城の本丸、二の丸は国の史跡に指定され、三の丸部分は「山形城三の丸跡」と別個に遺跡登録されている。山形城は、馬見ヶ崎川扇状地に14世紀後半に最上氏の始祖斯波兼頼により築かれたとされ、代々最上氏が居城としてきた。17世紀初頭には、最上義光により57万石の大名の居城として相応しい規模の近世城郭として三の丸まで拡張され、現在の山形市街地の原型となった。

しかし、義光の死後に発生した御家騒動により最上氏は改易される。その後入封した鳥居氏は馬見ヶ崎川の流路変更工事や山形五堰の整備、二ノ丸の大規模な改修を行い、現在の姿が完成された。

17世紀末以降山形藩は藩主が短期間のうちに度々変わり石高も徐々に減る。このことから、広大な城の維持は困難となり荒廃する。18世紀後半の秋元氏入封時には、本丸は更地となり二の丸内も小規模な建物が散見するだけで、藩主の屋敷は二の丸大手門の外に置かれた。藩士の住居も三の丸東半分にとめられ、三の丸の大部分は農地となった。武家屋敷の衰退に反比例し、城下町は紅花などの特産品を扱う富裕な商人が集住していたことや出羽三山参詣の拠点として大いに栄えた。

明治維新により山形城は廃城となり、三の丸の堀や土塁の多くは撤去され、三の丸内にも庶民が住居を構え市街地化が進み、新道を建設する新しい都市計画も実施される。しかし、戦後のモータリゼーションの発達により交通量が増大し、市街地での交通の停滞や事故の危険性が指摘されるようになる。そのため、幹線街路の利便性を高めるために山形広域都市計画道路事業が計画され、その一環として旅籠町八日町線を拡幅することとなり、

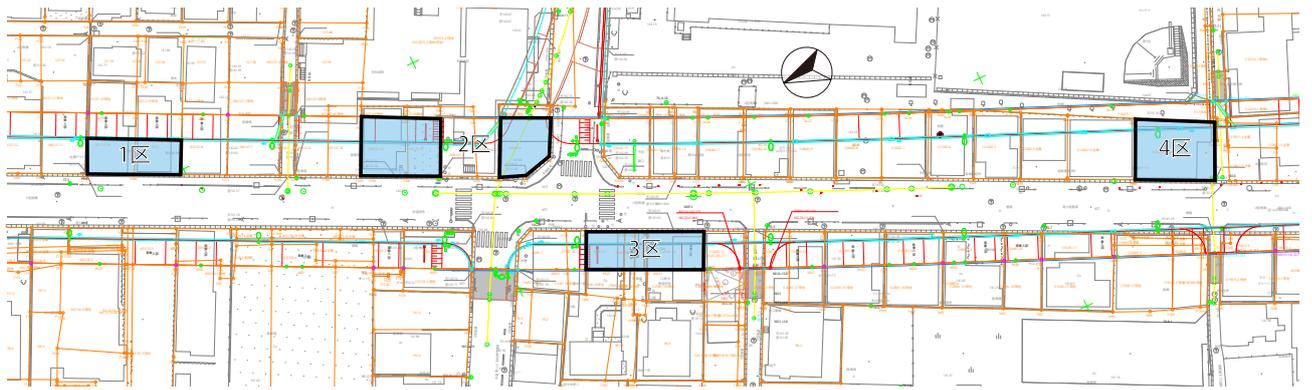


図1 調査区概要図 (1:1500)



写真1 2区竪穴住居跡 (北から)



写真2 4区竪穴住居跡 (西から)

三の丸跡の発掘調査を実施した。事業区内、今年度は830㎡で現地調査した。残りについては次年度以降、引き続き調査を行う。

遺構と遺物

今年度は、北から1～4区の4つの地区を調査した。1、2区には近世の遺構が検出された。2～4区では8世紀後半の遺構を確認できた。

1区からは直径2～3m、深さ1mほどの土坑が3基検出された。土坑には多数の大小の礫が詰め込まれ、18世紀代の瓦や陶磁器の破片を少量出土した。他にも同時期の溝跡や石組み遺構などが検出されている。

2区の北側は激しい攪乱を受けていたが、南側には大小の溝跡などの近世の遺構を検出した。出土遺物は18世紀代のものが多かったが、17世紀前半ぐらいのものも散見された。近世の遺構の下からは、一辺8mほどの竪穴住居跡が1軒検出され、8世紀後半とみられる須恵器や土師器などの遺物が出土した。

3区の南側は建物基礎により激しい攪乱を受けていたが、北側は残存状況が良好で一辺8m以上の竪穴住居跡を1軒検出され、8世紀後半とみられる須恵器や土師器

などの遺物が出土した。

4区は基本的に遺構の残存状況は良好であったが、一部が現代の攪乱により削平されていた。西壁面沿いに、出土遺物から近世と考えられる深い溝が南北方向に伸びているのを確認できた。また、一辺8mほどの竪穴住居を検出し、8世紀後半とみられる須恵器や土師器などの遺物が出土した。

まとめ

今年度の調査で、1、2区から近世の遺構を検出した。2～4区から8世紀後半の竪穴住居跡を検出した。江戸時代前期には有力家臣の屋敷地であったが、後期の秋元や水野期の山形城の絵図では、当該調査区付近には武家屋敷は無く、耕作地と記載されており、概ね事実であったと考えられる。

2区より南からは8世紀後半とみられる大型の竪穴住居跡が検出されており、次年度以降の調査でも同様の成果が期待できる。

残りの地区については、来年度以降に調査を行い、合わせて整理作業も進め、報告書にまとめて刊行する。